

スピノザ・コレクション書目

山梨大学附属図書館蔵



スピノザの肖像(彫刻銅版画 H. Lips作, ④パウルス版『スピノザ全集』第二巻より)

書物が物語る近代初期の知的な揺動

スピノザと思想家たちの時代

期間:2005年7月2日(土)-7月16日(土)

山梨大学附属図書館

ごあいさつ

附属図書館長
大友 敏 明

このたび、山梨大学附属図書館は、オランダが生んだ17世紀の哲学の巨人、スピノザの展示会を開催いたします。

この展示会は、1990年、附属図書館がスピノザの大型コレクションを購入して以来はじめての試みです。附属図書館は、これまで図書館ホームページをつうじて「スピノザの作品と影響」と題してその作品リストを公開してきましたが、今回こうして展示会を企画し、地域社会に広くコレクションを公開することができたのは、喜ばしい限りです。

展示会のコンセプトは、タイトルに示されたとおり、「スピノザと思想家たちの時代 書物が物語る近代初期の知的な揺動」としました。この難解な知の巨人を、来館の方々に少しでもわかりやすく理解してもらうにはどうしたらよいか、また17世紀と現代、オランダと日本とを切り結ぶ結節点は何かなど、われわれは企画・立案の当初から幾度となく議論しました。そうして上のようなコンセプトが出来上がったのです。17世紀と現代とを切り結ぶ結節点として考えられるのは、スピノザの作品が同時代の知識人階級にどのような影響を与えたのか、その思想の伝播性に焦点をあてることにしました。それはちょうど現代がインターネットの時代で、「インターネットが世界を変える」とまでいわれているように、17世紀は印刷技術が普及し、ギリシャ・ラテンの古典が独語や英語の各国語に翻訳されて、思想が急速に人々の手に伝播していく時代でもあったからです。ユダヤ人としての教養であるヘブライ語聖書の知識をもったスピノザの鋭い宗教批判が、当時の知識人階級にどれだけ大きな衝撃を与えたのかを知ることが、現代のネット社会に生きるわれわれにとっても意味のあることだと考えたのです。

大学の附属図書館は、大学が所蔵する貴重な財産 これは人類共通の財産でもあるわけですが を広く社会に公開する社会的責務を果たす役割を担っています。こうした観点から、今回作成したカタログも附属図書館のホームページで公開する予定ですし、またこのスピノザのコレクション自体も近い将来デジタル化し、広く世界に向けて公開する計画をもっております。附属図書館は、このように大学が所蔵する貴重な財産を地域社会に、あるいは世界に向けて発信できる体制を徐々にではありますが整備し実現していくつもりです。

今回の展示会を企画するにあたって力を尽くしてくれた附属図書館研究開発推進室員の森田秀二氏（教育人間科学部教授） 進藤聡彦氏（同教授） に対し、厚くお礼を申し上げます。また、企画・立案の早い段階から参加してくれた佐藤一郎氏（教育人間科学部助教授）には惜しみないご協力を賜りました。図書館職員と研究開発推進室員との見事なチームワークによって展示会が開催できたことは、附属図書館の歴史に新しい1ページを刻みえたと思っております。

書物をめぐる二つのたたかい

山梨大学スピノザ・コレクションの概要とカタログ凡例

佐藤 一郎

人間は言葉で考え、それをまた言葉で表わしてたがいに伝え合う。十七世紀の思想家たちの著作や書簡を見ると、このあたりまえとも言えることが他のどの時代よりも活潑に繰り広げられたという印象を受ける。これは、印刷された書物の急速な普及が思想伝達の様相を革めたことを抜きには考えられない。知の巨人たちは自分の思想を言葉にし、それをまもるために他を議論で駁することにしりごみをしなかった。だが他方そこでは、もうひとつの、書物をめぐる当時の宗教・政治権力とのたたかいに巻き込まれることも避けられず、出版のためのさまざまな配慮と工作に腐心を余儀なくされた。ここで解説をした山梨大学スピノザ・コレクションの個々の著者と本にまつわる歴史を覗きみると、あらためて十七世紀の思想家たちが身を置いた、思想の自由への希求と苛烈な現実との相剋に思い到らされる。

「スピノザの作品と影響 多領域に亘る稀覯書・重要書コレクション」は、96点、冊数にして108冊から成る。それを大きく分けると、(ア)スピノザの著作の原典(3冊①-③)(イ)全集とドイツ語・英語訳(12点)(ウ)十九世紀後半以降のスピノザ研究文献(およそ20点)(エ)その他、になる。数では一番多い「その他」に入るものを性格づけると、たとえば、祇スピノザの死後遺された蔵書目録にも照らしてスピノザが読んだ可能性がある著者の書物、義スピノザと何らかに関連がある先行もしくは同時代の著者(大哲学者も含む)の古刊本、蟻スピノザが影響を与えた後代思想家の古刊本、などが含まれる。ただし、一つの資料が祇と義の両方にあてはまる場合もあり、こちらは厳密な区分ではない。

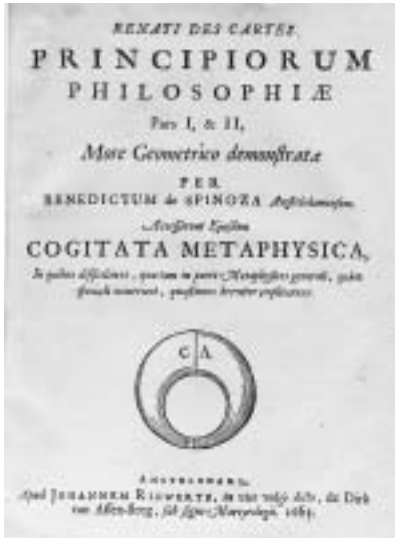
現在日本国内でスピノザの原典を所蔵している公共機関は11施設、計20点余りになる(「原典」とはここではスピノザ生前に刊行された『デカルトの哲学原理』と『神学・政治論』、死去の年に刊行された『遺稿集』とそのオランダ語訳版の4種をいう)。その中で原典2冊以上を所蔵し、かつスピノザ関連書をコレクションとして備えているのは、群馬大学、東海大学、大阪産業大学、本学の4箇所である。それぞれに個性をそなえるはずだが、本学コレクションは上に分類した「その他」に入る古刊本を多く揃え、スピノザをめぐる知の影響関係の広がりが往時の本によって推しはかれるような集成になっている。なかんずくアムステルダムポルトガル系ユダヤ人社会に出自をもつスピノザが教養形成の過程で影響を受け、実際にその蔵書にも遺されたユダヤ教・ユダヤ思想に関する貴重書を多く含むことは、このコレクションの特徴として特筆されてよいだろう。把握するかぎりでは、現在スピノザの原典版ウェブ画像を公開しているのは海外2施設のほか、国内では群馬大学だけである。いま述べたコレクションの特徴からも、山梨大学附属図書館が計画しているスピノザ原典も含めた古刊本のデータベース化がスピノザ研究者以外にも汎く裨益することは間違いない。

このたびの「スピノザと思想家たちの時代」展もいわばそうした資料公開の第一歩だが、それに合わせてコレクションの解説と一覧を刊行できた意義は大きい。このカタログは「展示資料の解説」(3-10頁)と「展示本以外のコレクション書目」(11-12頁)の二部から成る。スピノザの原典以外の展示本はおもに(エ)「その他」から、内容上意義あるもの、貴重なもの、興味深いものなどを考慮して選んだ。①などは展示資料を、⑤⑨などは展示外資料を示す(⑩はコレクション外、研究室備付)。書誌の記述では、版型は省略、スピノザ原典と⑩を除いては頁数も省いた。正確でかつ遺漏ない記述につとめたけれども、古刊本のタイトル記載の再録にはむずかしい問題もあり、統一がとれていない箇所もある。書名は挙げないが、解説執筆にあたり当然さまざまな参考書類の恩恵を受けた。解説文中、「遺品目録」とはスピノザの死後作成された遺産目録にある蔵書一覧のことである(それにもとづいて復元された蔵書はライデン郊外レインスブルフに保存された「スピノザの家」で保管・展示されている)。なお、「ライデン」「ホイヘンス」などの地名・人名は日本で慣用になっている呼び方に従った。展示本の選定、展示パネル・プレートの準備、このカタログの執筆などはすべて国際基督教大学非常勤助手の高木久夫氏と協同して進めた。解説は資料ごとに分担し、執筆者は末尾に記号で示した。客は筆者、脚は高木氏を表わす。高木氏にはここにあらためて感謝を申し上げる。

(教育人間科学部・助教授)

展示資料の解説

① スピノザ『デカルトの哲学原理 附録 形而上学的思索』(アムステルダム・1663年)



Renati Des Cartes Principiorum Philosophiæ Pars I, & II, More Geometrico Demonstratæ per Benedictum de Spinoza Amstelodamensem. Accesserunt Ejusdem Cogitata Metaphysica... —Amsterdam: Johann Rieuwerts, 1663 — (16), 140 pp.

スピノザ(1632 - 1677)の生前に著者名を掲げて出版されたただ一つの著書。デカルトの主著の一つ『哲学原理』の内容を、定義、公理、定理と進む幾何学のやり方で論じ直した主部分と、附録としてつけられた「形而上学的思索」とから成る。当時スピノザはカセアリウス(1641 [or 42] - 1677)というライデン大学の神学生を同居させ、デカルトの哲学を教えていた。その際口述して書き取らせたもの(『哲学原理』の第二部「物質的な物の原理」を扱う)に、第一部(『省察』の問題と重なる「認識の原理」)が友人たちの求めを受けて書き足された(第三部はわずかで終り未完)。書き足しは2週間で行われた。スピノザみずからの考えも挿まれているものの、この著述の主目的はデカルト哲学の説明である。そのために著者の考えとは一致しない見解も述べられていることを、著者の意を体した序文の中でローデヴェック・メイヤー(③および④参照)は断わっている。メイヤーはまたスピノザのラテン語を直し、出版に携わった(書簡8, 9, 12a, 13, 15参照)。附録の「形而上学的思索」は16世紀以来継承されていた新スコラ学による形而上学の一般部門、特殊部門の区分に従いながら、その主要な構成要素と用語を自身の見解によって説明した作品。第一部は存在者とそのありよう、第二部は神とその属性をおもに扱う。スピノ

ザは、おそらくオランダのピュルヘルスダイク、ヘーレボルト(ともに⑤参照)やクラウベルク(遺品目録の蔵書に著作が含まれる)らの著述から得た新スコラの知識とデカルト哲学とに対する中で、自分の哲学を確立していった。その形成を解明するために「形而上学的思索」は重要である。(S)

② スピノザ『神学・政治論』(ハンブルク [アムステルダム]・1670年)



Tractatus Theologico-Politicus Continens Dissertationes aliquot, Quibus ostenditur Libertatem Philosophandi non tantum salva Pietate, & Reipublicæ Pace posse concedi: sed eandem nisi cum Pace Reipublicæ, ipsaque Pietate tolli non posse... — Hamburg: Henricus Künraht [Amsterdam: Jan Rieuwerts], 1670 — (12), 233+1 pp.

スピノザが生前に刊行した唯一の完全オリジナル著作。哲学的な主著「エチカ」の執筆を5年ほど中断し、38歳で刊行。多くの17世紀の読者にとっては、「あのスピノザ」が『神学・政治論』を書いたというより、「あの『神学・政治論』」の匿名の著者がスピノザだった。本書は版元も架空(おそらく実際は友人ヤン・リューウェルツ)出版地も偽ったが、こうした小細工もその中身からして当然だった。本書は、歴史に介入し聖書を啓示した神をみとめず、カルヴァン派のもとめた神権政治の根拠を攻撃し、哲学する自由をもとめた。はたして出版直後から各地の当局が教会会議のもとめで本書の流通を禁じ、18世紀初頭にかけてヨーロッパ各地で禁令の布告と論駁書の発行があいつぐ。執拗な追及のうらには、したたかに本書を流通させた地下ルートが存在がうかがわれる。山梨大学本は真正の初版だが、おなじ発行年と版元をかかげて後年作られたそっくりの四折本が、今日すくなくとも3種類知られる。摘発を言いがれ

るため初版の残部と見せかけたものだった。このほか、医学書などの表題で偽装した八折本も、メイヤーの『聖書の解釈者としての哲学』^特と合本でスピノザの生前に3種類出回った。初版発行直後の蘭訳のうごきはスピノザ自身がすばやく封じたが(書簡44)これは民衆にも読める各国語での宗教批判にたいする取締りがきびしかったからである。たとえば『神学・政治論』発行の前年、オランダ語で神学批判をものした友人アドリアーン・クールバハは、印刷所を急襲され、獄死している。それでも本書はスピノザ歿後に翻訳され、20年ほどで仏・英・蘭訳を見た(いずれも著者・訳者とも匿名)。ホプス⁶⁴がその大胆さにあきれ、ライブニッツ⁶⁴が非難したという本書の宗教批判だが、単純に迷信や因習として宗教をおとしめるわけではない。むしろ隣人愛や神への従順など聖書のおしえは社会にやくだち、哲学的なきっかけのない人びとにも救いを与えるとしている。こうした融和的な一面は、出版のいきさつから教会への面従腹背と見られがちである。だが「神学と哲学の分離」という主張を真剣にうけとめるなら、これもスピノザの本意とみるべきだろう(特⁶⁷参照)(*t*)

③ スピノザ『遺稿集』(発行地・版元記載なし
[アムステルダム]・1677年)



B.D.S. *Opera Posthuma, Quorum series post Praefationem exhibetur*, 1677. — (XL), 614, (32) + (II), 112, (8) pp.

(B.D.S.はBenedictus de Spinozaの頭文字)

スピノザが世を去った年の12月に刊行された。編集者の序文、「エチカ」、「政治論」(未完)「知性改善論」(未完)「往復書簡集」、「ヘブライ語文法綱要」(未完)から成る(通称OP)。このうち最後のものを除いたオランダ語訳の『遺稿集』(De Nagelate Schriften NS)もほぼ時を同じくして刊行され

た。オランダ語原文の一部書簡の場合を別にして、OPはこれらの作品の原典であり、NSはそれに準ずるものとして参考に用いられる。スピノザは1677年2月にハーグで死去したが、それに先立って、主著「エチカ」の匿名での出版に備えていた(書簡62および68参照)。伝承によれば、その死の直後、遺稿は家主を介して、友人でもあったアムステルダムの出版業者リューウェルツ(①②の刊行者)に託された。『遺稿集』の編集者が誰かという点については説が定まっていなかったが、オランダ語訳『遺稿集』の序文の筆者がスピノザのサークルの一人ヤーラッハ・イエレスであることはほぼ確かであり、それに基づく本書ラテン語序文はローデヴュク・メイヤー(特⁶⁷の著者)の手に成るとみる説が有力である。『遺稿集』は刊行の翌年には、神を信じない異端の書として焚書が命じられ、所持も禁じられた。なお、この『遺稿集』にはスピノザの肖像画を含む版本が稀にあることが知られているほか、異なる扉の本(おそらくのちの印刷)も2例あったことが伝えられている。(S)

特⁶⁷ ローデヴュク・メイヤー『聖書の解釈者としての哲学』[アムステルダム]・1666年)



[Meyer, Lodewijk:] *Philosophia S. Scripturae Interpres: Exercitatio Paradoxa...* — Eleutheropoli, 1666 — (XII), 105, (1 blank), (10) pp.

自由思想の重要書。著者匿名、版元記載なし。発行地も偽られている。のちにスピノザの「神学・政治論」(②の異版)と合本で再刊されたことから、ある時期著者はスピノザとみられたとも推測されている。著者メイヤー(1629 - 1681)はスピノザの友人として、スピノザの著書出版に大きな役割を務めた(①, ③参照)。本書はメイヤー自身の哲学分野でのもっとも重要な仕事である。分裂に陥っているキリ

スト教界を根底から建て直すために、デカルトの疑いの方法を神学にもあてはめ、神の言葉である聖書を解釈する規範は哲学であるという主張を展開している。非常な物議をかもし、禁書に指定された。メイヤーの立場は、哲学とは隔てて聖書に信仰上の存在理由を残したスピノザ以上にラディカルと言える。結語の末尾では、当代の哲学を創始し弘めた先駆者としてデカルトを称えたあと、続く者として名前を出さずに、書かれつつあったスピノザの「エチカ」を示唆している。メイヤーは思想・哲学分野だけでなく、医師、劇作家、劇場支配人、詩人、翻訳者、文芸批評家、文法学者、辞書編集者として多才を發揮した。最後に挙げた分野での *Nederlandsche woordenschat ...* (『オランダ語語彙』、1654年の第二版以降を編纂) はオランダ語の純粋国語化の過程での外来語用法を網羅し、哲学用語の意義研究にも第一級の重要資料である。(S)

④ 『スピノザ全集』(パウルス版)(イエナ・1802-1803年)

Benedicti de Spinoza Opera quae supersunt omnia. Iterum edenda curavit, praefationes, vitam auctoris, nec non notitias, quae ad historiam scriptorum pertinent addidit Henr. Eberh. Gottlob Paulus, Volumen prius et volumen posterius cum imagine auctoris, Ienae in Bibliopolio Academico, 1802-1803.

『遺稿集』③刊行後125年ぶりに編まれたスピノザの最初の全集。出た時期は18世紀末に起ったドイツでのスピノザ復活(いわゆるスピノザ・ルネサンス)の直後。ヤコービ(⑧参照)とメンデルスゾーン間の「汎神論論争」からスピノザへの関心が高まった機運と無関係ではなかったであろう。他方、19世紀半ば以降本格的に進められる実証的なスピノザ研究には半世紀の間がある。第一巻には生前に刊行された「デカルトの哲学原理」と「神学・政治論」の他に往復書簡集、第二巻には書簡以外の『遺稿集』収録作品に加えて伝記資料を収める。「エチカ」の原型である普通の叙述形式で書かれた「神、人間とそのさいわいについての短論文」は伝聞にとどまり、この時まで発見されていない。パウルスは「短論文」に含まれると伝承されていた「悪魔」についての章を「エチカ」から散逸したものと解し、その補遺を所有している者がオランダにいたら知らせてくれるように呼びかけている(第二巻、XV頁)。以後20世紀に向けて、発見される「短論文」や小品、書簡を補ってより完全なスピノザ全集が編まれてゆく。(S)

⑦ ベール『歴史批評辞典抄』(ベルリン・1765年)

BAYLE, Pierre: *Extrait du Dictionnaire historique et critique*, 2 vol. — Berlin: Chrétien Frédéric Voss, 1765.

ピエール・ベール(1647 - 1706)の代表作「歴史批評辞典」(初版1696年、二千数百頁の浩瀚の書、他の著作と違い著者名と出版社を偽らずに出版)の抜萃版。ベールはフランスのトゥールーズ近郊でプロテスタントの牧師の家に生まれた。カトリックに改宗してイエズス会の学院に入ったものの、短期間でプロテスタントに戻り、カルヴァン派に属した。1680年にオランダのロッテルダムに移り、歴史と哲学の教授だったが職を逐われ、文筆家として活動して当地で歿した。プロテスタントの神学者とも盛んな論争を行った。近世思想史の中でベールは、当代の哲学上の議論を広く捌きながら批評的に掘り下げた点で際立つ。同時代の思想界への影響も大きかった。ライプニッツの『弁神論』④もベールの本の読書が機縁になって書かれた。理性の限界の自覚と懐疑主義がベールの思想の中心をなし、信仰と理性・道徳・良心とのかかわり、宗教上の寛容を問題として追究した。「歴史批評辞典」の「スピノザ」の項(この抜萃版にも収録)は初期のスピノザの伝記資料としても重要である。その記述は特にフランスで長くスピノザ像の基礎になった。ベールは無神論を批判する立場から、スピノザの『神学・政治論』②を「有害で忌まわしい本」と決めつける傍ら、スピノザの人としての持ち前や振舞いへの良い評判を伝えている。(S)

⑤ メナセ・ベンイスラエル『ニシュマツト・ハイーム』(「生ける者たちの靈魂」の意、アムステルダム・1651年)

BEN-ISRAEL, Menasseh: *Sefer Nishmath Chayim*— Amsterdam: Samuel Abarbanel Soeyro, 1651.

アムステルダムのポルトガル系の教学院でスピノザをおしえたラビ・メナセ(1604 - 1657)による、靈魂不滅説の論考。ユダヤ教の古今の議論をひいて、個人の靈魂が身体の死後もほろびず、終末に審判をうけることを弁証。これなくしては神への畏敬はうしなわれ、ひいては宗教は崩壊すると主張する。アムステルダムでは1656年のスピノザ破門以前に、メナセをふくむ4人のラビがそろって靈魂不滅説の弁証をあらわしている。これはウリエル・ダコスタ(1585 - 1640)(④⑦参照)が、『タルムード』の權威と靈魂不滅説を公然と否定し、破門ののち自殺に

までおいこまれた事件の余波と言える。この教理をめぐる動揺はスピノザの破門までつづいたと見るべきだろう。スピノザの破門理由は判然としないが、それを不滅説にかんする異端的言動にもとめる仮説は有力である。博識をもってキリスト教世界に知られたメナセだが、かれの初のヘブライ語著作となる本書刊行ののちもアムステルダムの教団では重用されなかった。スピノザ破門の前年にあたる1655年、ユダヤ人の英国入国許可をクロムウェルに請願。英国滞在からの帰途、客死した。(t)

④⑧ フィリップ・ファン・リンボルフ 『異端審問史』(アムステルダム・1692年)

LIMBORCH, Philippus van: *Historia Inquisitionis cui subjungitur Liber Sententiarum Inquisitionis Tholosanae ab anno Christi 1307 ad annum 1323* — Amsterdam: Weststen, 1692.

アムステルダムのレモンストラント派神学院教授リンボルフ(1633 - 1712)の著作。とりわけ戦慄をよぶのは、1662年にスペインからアムステルダムにのりユダヤ教に回帰したイサーク・オロピオ・デカストロ(1620 - 1687)による、セヴィーリヤの地下牢での拷問の回想。異端審問は15世紀後半からナポレオン時代まで、改宗ユダヤ人をおもな標的とした。スピノザの父祖がなぜポルトガルから逃亡したのかがうかがわれる。審問はカタリ派やワルドー派を対象に13~14世紀から苛烈をきわめたが、本書はこの時期の名だかい審問官ギーらによる「トゥールーズ異端審問判決集」を収録。リンボルフの死後、その原本がカトリック教会に焼却されることをおそれ、ユトレヒト在住の蒐書家ファーリー父子が、これを故国英国に売却する。父ファーリーは亡命中のジョン・ロックを保護し、ロックも本書の刊行に協力した。リンボルフは本書の4年前にデカストロとの往復書簡集を出版、寛容主義的立場からユダヤ教と護教論争をまじえた。また自著の附録として、ユダヤ教を論駁したダコスタ(④⑥ ④⑦参照)の遺稿(偽書説あり)もはじめて刊行した。(t)

⑤⑩ ビュルヘルスダイク 『論理学綱要』(ケンブリッジ・1680年) ヘーレボルト 『ヘルメネイア・ロギカ、あるいはビュルヘルスダイク論理学概要』(ケンブリッジ・1680年)

BURGERSDIJCK, Frank Pieterszoon: *Institutionum logicarum libri duo* — Cambridge, Joann. Hayes, 1680. HEEREBOORD, Adriaan: *EPMHNEIA [Hermeneia] logica seu synopseos logicae burgersdicianae. Explicatio...* Editio nova accurata, Accedit ejusdem Authoris Praxis logica — Cambridge, Joann. Hayes, 1680.

ビュルヘルスダイク(1590 - 1635)の論理学教科書(初版1626年)と、ヘーレボルト(1614 - 1661)が編集したビュルヘルスダイク論理学の要約(初版1650年)との合本。ビュルヘルスダイクはライデン大学の教授。17世紀前半のオランダで一番影響力のあった哲学者。論理学ではメランヒトン(1497 - 1560)ら人文主義者の考えも取り入れてアリストテレス論理学を再構築しようとした。他の柱をなす自然学はザバレラ(⑥⑨参照)らに代表されるパードヴァのアリストテレス学派に通じ、形而上学はスペインの哲学者スアレス(1548 - 1617)の影響を受けている。道徳哲学、政治哲学の著作もある。もっとも成功をおさめたのがこの論理学教科書であり、当時オランダでの論理学教育を主導する役目を果し、国外でも幾度も上木された。ヘーレボルトの概説書は、その後哲学の教育課程で論理学が退潮したのに応じて、ビュルヘルスダイクの教科書を簡略にしたもの。ヘーレボルトはビュルヘルスダイクの弟子であり、やはりライデンで教えた。デカルトへの共鳴を表明したため抑圧されて不遇だったが、本書が示すように編著書は死後も英国で版を重ね、用いられた。スピノザの遺品目録にはこの二人の本は記録されていないが、「形而上学的思索」①第二部第12章でヘーレボルトの名を挙げて引用している。このほかでは、「短論文」第一部と「エチカ」第一部で「原因」を扱う中でこれらの著者の用語が使われており、少なくともヘーレボルトのこの本と『メレテマータ・フィロソフィカ』(初版ライデン、1654年)とについて知識をもっていたことは間違いない。(s)

⑤⑪ アルノー、ニコル 『ポール・ロワイヤル論理学』(パリ・1763年)

[ARNAULD, Antoine et NICOLE, Pierre] *La logique ou l'art de penser...* Nouvelle Edition, revue & corrigée — Paris, E. F. Savoye, 1763.

カトリック内部で信仰の純化を求めるジャンセニスト(オランダの神学者ヤンセンに由来)の指導者アントワーヌ・アルノー(1612 - 1694)が同派のニコル(1625 - 1695)と共著で著した論理学書(初版1662年、本書は多くの筆が加えられた1683年の第五版に基づく)。ジャンセニストはパリ郊外のポール・ロワイヤル修道院を本拠とし、その付属学校での教科書として書かれたことから「ポール・ロワイヤル論理学」の通称でも呼ばれる。デカルト哲学の影響を受けたこの作品は、17世紀の認識論の標準的見解を示したものとして重要な意義をもつ。スピノザの

遺品目録にもこの書が記録されている。アルノーはデカルトの『省察』(1641)に付けられた第四論駁の著者であるほか、マールブランシュ、ライプニッツとも論争の相手としてかわった。(S)

52 ヨセフ・イブンヴェルガ『シェエリット・ヨーセフ』(マントヴァ・1593年)

IBN VERGA, Joseph: *Sefer She'erith Yosef*
— Mantova: [Tomaso Ruffineli], 1593)

ヘブライ語聖書とならぶユダヤ教の正典『タルムード』の、叙述・論法上のさまざまな原則についての解説。全44葉の四折本。このコレクションでは唯一の16世紀ヘブライ語刊本。スピノザの遺品目録にも本書の八折本がふくまれ、折型より1554年アドリアノーブル刊の初版とみられる。師資相承が原則のタルムードを、方法論的に分析・体系化する姿勢は、イベリア系ユダヤ人の知的伝統をしめすばかりでなく、やがてタルムードの権威をゆさぶるダコスタ④⑥⑦やスピノザなど、17世紀のポルトガル系異端者を予感させる。著者ヨセフ・イブンヴェルガ(? - c. 1559)はリスボンからオスマン帝国のアドリアノーブルに亡命。「ヨセフの末裔」という書名はポルトガルでカトリック教会に捕らえられた息子への追慕をうかがわせる。著者は父とともにイベリアでの迫害の記録も編纂・刊行した。(t)

53 マイモニデス『迷える者たちの手引き』(バーゼル・1629年)

Majemonidis, R. Mosis (= Moshe ben Maimon):
Liber doctor perplexorum — Basel: König, 1629.

中世ユダヤ最大の思想家の哲学的名著。マイモニデス(1135 - 1204)はスコラにも知られたが、ヨハネス・ブクストルフ(子)⑤④⑦⑩による本訳がラテン訳の決定版となる。ポイル⑦⑧やライプニッツ③④もこれもちいた。原典はヘブライ字母表記のアラビア語だが、本編はイブン・ティボンの権威あるヘブライ訳からの重訳。「神学・政治論」②および書簡で10回ほど言及されたマイモニデスは、スピノザのユダヤのソースのうち最多。スピノザは『手引き』をヘブライ語で引いており、遺品目録にもヴェネツィア刊のヘブライ語版がみとめられる。マイモニデスが聖書テキストの字義的理解をしりぞけ推論的理性による判断を優先させる場面をとらえ、その恣意性を批判するスピノザの舌鋒は、中世ユダヤ哲学への通暁をうかがわせる。マイモニデスはユダヤ法学の最高権威としてヘブライ語の著作では律法を完全に擁護した一方、哲学者むけのアラビア語の著作では、

律法の神人同形説的なテキストを大衆むけのたとえなしと喝破した。『迷える者たちの手引き』は、イスラーム経由で浸透したアリストテレス哲学と聖書の調停をめざした。だが守旧派法学者は本書の摘発のため、ときには家宅搜索やカトリックの異端審問(④⑧参照)への共助さえためらわず、13世紀をとおし熾烈な教理論争がつづいた(⑤⑩参照)(t)

%4 ヨハネス・ブクストルフ編『ヘブライ語書簡便覧』(バーゼル・1629年)

BUXTORF, Johannes (filius): *Institutio epistolaris Hebraica, sive de conscribendis epistolis Hebraicis liber, cum epistolarum Hebraicarum centuria... "Cum Append. Variarum Epistolarum R. Maiemonis et Aliorum ..."* — Basel: Ludovicus Regis, 1629.

子ブクストルフ(1599 - 1664)⑦⑩(⑤③の訳者)による、ヘブライ語書簡集。中世のユダヤ人識者による100通のテキストを校訂、母音符号をふり、ラテン訳と欄外註を付す。初版は父ブクストルフ(1564 - 1629)による1610年版だが、子ブクストルフによるこの1629年版が決定版となる。書簡は1550年代以降のいくつかのヘブライ語の類書から引いた。「神学・政治論」第15章の注記でスピノザもマイモニデスとその反駁者の書簡集を読んだと述べている。本書も巻末にマイモニデスの哲学的書簡と後代の論争を収容するが、13世紀のユダヤ世界をおおったこの論争(⑤⑧参照)は、本書により「神学・政治論」②の時代すでにキリスト教世界に知られていた。(t)

57 アブラハム・ガイガー編『メロー・ホフナイーム』(「両掌のなかみ」の意、ヨセフ・デルメディゴ「ベンナータン宛書簡」収録、ベルリン・1840年)

GEIGER, Abraham: *Melo Chofnayim* [DEL-MEDIGO, Joseph Salomon: "Brief an Zerah b. Natan"] — Berlin: Friedländer, 1840.

クレタ出身のラビ、医師であり、ガリレオのもとパードヴァで数学と天文学もおさめたヨセフ・デルメディゴ(1591 - 1655)が、1624年前後にリトアニアのカライ派の学者にあてた書簡の校訂本文と独訳。カバラーの神秘主義、数学、文法学、哲学などを論じ、自著の抄録もふくむ。編訳者ガイガーによるヨセフの小伝も収録。1628年から2年ほど、ヨセフはスピノザの師メナセ④⑤にまねかれアムステルダムでラビをつとめ、当地で著作も上梓した。スピノザの遺品目録にも "abscondita sapientiae" なるヨセフの著作が見られるが、これはバーゼルで1629年に刊行された論集『隠れたる智慧』(Taalumoth Hokmah)で

ある。この論集にヨセフは遠縁にあたるエリヤ・デルメディオ(1460 - 1497)の主著「宗教の検証」を収録。イスラームの哲学者アヴェロエス(1126 - 1198)を引いて宗教と哲学との徹底した分離を主張し、「神学・政治論」②にもその共鳴が指摘できる。「宗教の検証」はその合理主義的主張のためなかなか刊行されなかったが、ヨセフは反駁のためあえて俎上にあげるとしてこれを刊行した。本書の编者ガイガー(1810 - 1874)によればヨセフの真意は合理主義の擁護にあり、それは本書に収録した書簡からうかがわれる。ガイガーは19世紀の批判的ユダヤ学の唱道者であり、また改革派ユダヤ教をみちびき、正統派からの分離をはたした。(t)

㉟ ベーコン『全集』全4巻(ロンドン・1730年)

BACON, Francis: *Opera omnia*, 4 Vol. — London: R. Gosling, 1730.

英国ルネサンス期の政治家にして経験論の哲学者フランシス・ベーコン(1561 - 1626)の最初に集成された全集。スピノザの遺品目録には「随筆集」(初版1597年)のラテン語版が見られる。スピノザの書いたものにこの著作からの引用や明らかな反映は見出せないのが、実際に読んでいたのかどうかはわからない。だがスピノザは四つの書簡でベーコンを引合いに出して(書簡2, 6, 13, 37 最初のものが重要、書簡6と13はボイルに関連して言及)、その典拠は「ノーヴム・オルガヌム」と考証される。初期の著述である「知性改善論」でも、名前は挙げられていないけれども、道具と製作の譬えによる知性の進歩の説明などにベーコンとの関連が認められ(注記の中には「経験学派」という言葉もある)、「ノーヴム・オルガヌム」と共通の用語、言い回しも研究者によって示されている。これらから、書簡の時期も考慮に入れて、スピノザがその哲学形成期のわりあい早い時期にベーコン(の少なくとも「ノーヴム・オルガヌム」)を読んで吸収し、影響を受けたと推測することができる。(s)

㊦ デカルト『哲学著作集』(アムステルダム・1677年)

DESCARTES, René: *Opera Philosophica. RENATI DESCARTES Principia philosophiae. Ultima Editio cum optima collata, diligenter recognita, & mendis expurgata. Spicimina philosophiae seu Dissertatio de Methodo Rectè regendae rationis, et veritatis in scientiis investigandae: Dioptrice, et Meteora... Passiones Animae...* Amstelodami, apud Danielem Elsevirium, 1677.

第一分冊「哲学原理」、第二分冊「方法叙説」「屈折光学」「気象学」、第三分冊「情念論」(いずれもラ

テン語)を合本。エルゼヴィール版デカルト著作集の最終版(Willems 1530)、初版(1644年)は「哲学原理」の初出。スピノザの遺品目録にはこの著作集の第二版(1650年)を含め計7冊(うち2冊はオランダ語訳)のデカルト書が見られる。①が示すようにデカルト(1596 - 1650)は、スピノザがそこから学んで自分の哲学を築いていく契機とされたもっとも重要な哲学者だった。1628年にデカルトは隠棲を求めてオランダに移り、滞在は終焉の地スウェーデンに赴くまで20年に及んだ。「方法叙説」と書簡では、「他人のことを穿鑿するよりは自分の仕事を大切にす活動的な人々の群れに混じって、賑わった町の便利を欠かずに、無人境のように独り隠れて生活できた」ことや、大勢の人が雑踏する中を毎日歩き回る自由な心地などが述べられている。それはスピノザが生を享けた頃のアムステルダムの様子である。(s)

㊧ ホッブズ『哲学要綱、市民について』(アムステルダム・1647年)

HOBBS, Thomas: *Elementa philosophica, de cive, auctore Thom. Hobbes Malmesburiensi*. Amsterodami, apud Ludovicum Elzevirium. Anno 1647.

ホッブズ(1588 - 1679)の三部から成る哲学体系の最後の部(1642年初版)、他は「物体について」と「人間について」。出版前ホッブズは、ピューリタン革命前夜の不穏な状態の英国を脱出してフランスに亡命し、1651年(『リヴァイアサン』出版の年)までの11年間をパリで過す。パリでは学界のメッセンジャーのような役割を果たしていたメルセンヌ神父(1588 - 1648、デカルトの親友)を通じてガッサンディ(㉞参照)と友好の関係を得、またデカルト『省察』への第三論駁の執筆を引き受けた。本書は1654年にローマ法王庁の禁書目録に載せられる。この1647年のエルゼヴィール版(Willems 1048)は、ライデン郊外レインスブルフに保存されている「スピノザの家」にある、遺品目録を復元した蔵書中のものと同じ版。書誌学上の知見に照らすと、本コレクション本はエルゼヴィール印刷所ではなく別の版元で製作された版とみられる。スピノザがホッブズの名に言及しているのは二箇所(書簡50と「神学・政治論」②の注記)だけであるけれども、「神学・政治論」と「政治論」とでは第一に関係を検討しなければならない近世哲学者である。(s)

65 アリオスト 『狂えるオルランド』(リオン・1556年)

ARIOSTO, Lodovico: *Il Furioso...* — Lyons: Bartholomeus Honoratius, 1556.

ルネサンス期イタリアの詩人ルドヴィコ・アリオスト(1474 - 1533)の代表作(初版1516年)四十六歌から成る英雄物語詩。ヨーロッパで広く流行り、読まれた。スピノザは「神学・政治論」第七章でこの作を読んだ覚えに触れ、「知性の観点からは受けとめがたい夢ものがたり」とも評している。ペルセウス(とアンドロメダ)の神話との酷似を指摘しているのは通説と符合する。遺品目録には入っていないが、たしかに読まれているとみてよい。古典ローマ文学を別にすれば、文学作品に言及した稀な例である。(S)

70 ヨハネス・ブクストルフ(子) 『タルムードおよびラビ文献カルデア語辞典』(バーゼル・1639年)

BUXTORF, Johannes (filius): *Lexicon Chaldaicum, Talmudicum et Rabbinicum* — Basel: König, 1640.

「カルデア語」は今日で言うアラム語。『タルムード』などのユダヤ教文献や古代訳聖書(タルグム)が用いる。この辞書は、父ブクストルフが編纂した1607年の『ヘブライ語カルデア語辞典』(当コレクション⑦①は1710年の11版)を子ブクストルフが拡充したもの。初版。信頼性はひくいが語彙・用例が豊富で類書も少なく、批判的ユダヤ学があらわれる19世紀まで重宝された。本書は聖書の理解にかかせないユダヤ教の古典註解に、キリスト教世界が目をむけはじめたことをしめす。父ブクストルフはユダヤ人の学者をやとい、ヘブライ語聖書とタルグムの校訂本を出し、キリスト教世界のヘブライ語研究を加速させた。子ブクストルフもメナセ・ベンイスラエル④⑤など人文主義的なラビと交流。また『迷える者たちの手引き』⑥③やイエフダ・ハレヴィーの『クザーリ』などをラテン訳し、中世ユダヤ哲学の水準を紹介した。(t)

73 ジャン・ルクレール編訳註 『旧約聖書・歴史書』(アムステルダム・1708年)

CLERICUS, Johannes (=Jean Le Clerc): *Veteris Testamenti Libri Historici* — Amsterdam: Schelte, 1708.

旧約の歴史的諸巻のラテン訳および註解。著者ルクレール(1657 - 1736)はスピノザの直後のキリスト教ヘブライ語学者で、この世代のプロテスタント世

界の第一人者とされる。1684年、リベラルな立場のため出身地ジュネーブをはなれ、リンボルフ④⑧のまねきでアムステルダムのレモンストラント派神学院でヘブライ語、哲学、教会史をおしえた。ルクレールは盟友リンボルフやロックとともに穏健啓蒙的な立場をとり、字義直解的な厳正派から強く批判された。一方でかれもみずからの非急進性のあかしとするかのように、スピノザをねらい撃ちにした。ルクレールも中世以来の寓意的・靈感主義的な釈義がもはや神学を支えきれないと考え、総じて合理的な解釈をとったが、一方で啓示とイエスの権威をまもることにも腐心した。教会の権威など歯牙にもかけない急進主義と教会の教条主義とのあいだでの苦しい舵とりだったと言える。(t)

74 グロティウス 『旧約聖書註解』全3巻(ハレ・1775年)

GROTIUS, Hugo: *Annotationes in Vetus Testamentum, Emendatius edidit et Brevibus complurium Locorum Dilucidationibus auxit Georgius Ioannes Ludov. Vogel*, 3 vol. — Halle: I. Kurt, 1775.

グロティウス(1583 - 1645)は「近代自然法学の父」、「国際法の祖」とも呼ばれ、主著の『戦争と平和の法』(1625)が有名だが、元来は人文主義の文献学者。のちに政治家、外交官として活動した。研究は古典文学、宗教、法学、歴史など多方面にわたり、多くの著作がある。グロティウスはキリスト教の異宗派間の宗教的寛容を説いて、その和合に努めた。だが、この17世紀オランダを代表する知識人の実人生は戦争の波に揉まれた。大逆罪の終身禁固刑で幽閉され、奇抜な手段で脱獄を果すも、また亡命を余儀なくされ、最後は船の遭難から避難した後に波瀾の生涯を閉じた。本書はギリシア・ローマの古典文学に関する知識も援用しながら聖書の意味を解明しようとしたもの(初版アムステルダム、1644年)。スピノザの遺品目録にはグロティウスの著書2冊が記録されている。人文主義の文献学的方法による聖書解釈、宗教権力からの国家主権の独立、人間の理性への信頼と自然法思想など、グロティウスの主張と著作が、「神学・政治論」を始めとするスピノザの著述に影響を与えたことは十分ありうる。(S)

77 ベニート・アリアス = モンターノ編訳 『ヘブライ語聖書』(ジュネーブ・1671年)

ARIAS-MONTANOS, Benedictus (=Benito Arias-Montano): *Biblia Hebraica* — Geneva, 1671.

カトリックの碩学モンタノス(1527 - 1598)によるヘブライ語聖書全巻の校訂テキストおよびラテン

語行間訳。著者は1569 - 72年に、旧新約全巻の各種古代訳を並記した二折・8巻本聖書Biblia Regia (polyglotta secunda) を発行したが、本書はその普及版。逐語行間訳の簡便さからひろくもちいられ、スピノザの遺品目録にもみられる。だがカトリックのウルガータ・ラテン訳聖書の絶対性を脅かすと批判され、編訳者も「ユダヤ化」をうたがわれ異端審問に付された。しかしカトリック世界の各地に擁護の声があがり窮地を脱した。このさいの経緯などから、かれが改宗ユダヤ人だったという憶測は、否定された。(48 参照)。(t)

78 ロバート・ボイル 『聖書のスタイルに関する考察』(ロンドン・1661年)

BOYLE, Robert: *Some considerations touching the style of the H. Scriptures. Extracted from the several parts of a discourse, concerning divers particulars belonging to the Bible...* — London: Herringman, 1661.

スピノザとの硝石論争でも知られる「近代化学の父」ボイル(1627 - 1691)の、神学者としての横顔をしめす著作。1650年ごろ執筆。かれはギリシャ語・ヘブライ語もまなび、本書では文献学的に聖書解釈を論じ、わずかながらユダヤの釈義にもふれる。本書は初版の4年後には英国でラテン訳され、のちに大陸でも再版された。ボイルは手稿のなかで全能説の立場からスピノザの奇蹟論を斥けたことで知られるが、本書からはその聖書へのアプローチが文体的特徴や論理性をよみとろうとする合理的なものだったことがうかがわれる。体系的な実験で物理学と化学を革新したボイルは、英王立協会書記オルテンバークを介したスピノザの文通相手のひとり。1662 - 63年の硝石再生の実験をめぐる論争(書簡5, 6, 13, 14)は、中世スコラ其自然学をのりこえる産みの苦しみとも言える。ボイルはまた滞英中のメナセ・ベインスラエル45とも交流があったと考えられる。(t)

81 ホイヘンス 『宇宙観察者、あるいは惑星世界とその住人に関する推察』(グラスゴウ・1757年)

HUYGENS, Christiaan: *Cosmotheoros or Conjectures Concerning the Planetary Worlds, and Their Inhabitants* — Glasgow: Rob. & And. Foulis, 1757.

光の波動説を唱えた物理学者で数学者クリスティアーン・ホイヘンス(1629 - 1695)の遺著(初版ハーグ、1698年)の英訳。科学と宗教を総合的に扱い、科学技術における自身の履歴も綜括している。プロテスタントの有神論に拠りつつ、地球が惑星の一つにすぎないというコペルニクス説を支持するホイヘ

ンスは、世界が神の意志にしたがって創られたのならば、他の惑星にも知的・社会的生物が住む可能性を排除する理由はないと論じている。論の初めでは、望遠鏡を製作し天体を観察した思い出も語る。スピノザの書簡26(オルデンバーク宛)からは、ホイヘンスと交際があり、顕微鏡と望遠鏡が話題にされたことが知られる。遺品目録にはホイヘンスの主著の一つ『振り時計』があった。160冊ほどの蔵書のうち、自然科学関係は二十数点。著名な科学者としては他にケプラー、ボイル78のものを含む。また興味を惹く名として、解剖講義の場面を描いたレンブラントの有名な作品のモデルになっているニコラース・トゥルプの医学書が見られる。(s)

84 ライプニッツ 『弁神論』(ブリュッセル・1734年)

LEIBNIZ, Gottfried Wilhelm: *Essais de Théodicée sur la Bonté de Dieu, la liberté de L'Homme & l'origine du Mal. Par Monsieur Leibnitz. Tome premier* — Bruxelles: François Foppens, 1734.

ライプニッツ(1646 - 1716)は近世合理論を代表する哲学者の一人。ドイツのライプツィヒに生まれ、ハノーヴァーで歿した。スピノザより14年若い。論理学の展開にも貢献し、数学者としては微積分法を発表した。学者としてだけでなく、外交官、政治家などの実務も兼ねて、ヨーロッパ各地で活動した。かかわった学問は前記以外に神学、法学、言語学、歴史編纂、物理学を始め、ほとんど万般にわたる。当代の著名な哲学者、科学者たちとも文通、会見をした。「バロックの哲学者」とも呼ばれ、関心の多面さ、活動性はスピノザと対照的である。スピノザにとっては、同時代の大哲学者の中で、書簡を交わし面談もしたただ一人。光学をめぐる書簡を交わしたが(書簡45, 46) 後には書いたものをライプニッツに見せることに用心している(書簡70, 72)。スピノザの死の前年、ライプニッツはハーグを訪れて面談した。『弁神論』(1710年の初版は著者名を載せていない)は哲学関係では生前公刊された唯一の著作。プロイセンの王妃ゾフィー・シャルロッテと読んだピエール・ベール79への批判が契機になっている。原題のThéodicéeは「神の正義」の意。神の造った世界は完全であり、個々の悪も全体の善のために存在しているという最善観が示される。この長大な書には時事的報告も挿まれ、スピノザについても伝記報告を含む論評がある(372 - 376節、このコレクション本第一巻には含まれない)。(s)

展示本以外のコレクション書目

- ⑤ *B. de Spinozas Sämmtliche Werke. Aus dem Lateinischen mit einer Lebensgeschichte Spinozas von Berthold Auerbach.* 2 Bde., Zweite Aufl. — Stuttgart: J. G. Cotta, 1871.
- ⑥ **Baruch de Spinoza:** *Sämmtliche philosophische Werke*, herausgegeben von O. Baensch, A. Buchenau, C. Gebhardt, J.H. von Kirchmann und C. Schaarschmidt. 6 Bde in 2, Dritte Aufl. — Leipzig: Dürr, 1907.
- ⑦ **Benedict von Spinoza:** *René Descartes' Prinzipien der Philosophie, erster und zweiter Theil in geometrischer Weise begründet... uebersetzt und erläutert von J.H. von Kirchmann* — Berlin: Heimann, 1871.
- ⑧ **Spinoza:** *Kurze Abhandlung von Gott, dem Menschen und seinem Glück, übertragen und herausgegeben von Carl Gebhardt* — Leipzig: Felix Meiner, 1922.
- ⑨ **B. Spinoza:** *Abhandlung über die Vervollkommnung des Verstandes... Neu übersetzt von I. Stern* — Leipzig: Philipp Reclam, o. J. [1887].
- ⑩ **B. Spinoza:** *Der Theologisch-politische Traktat... Neu übersetzt von I. Stern* — Leipzig: Philipp Reclam, o. J. [1886].
- ⑪ **B. Spinoza:** *Die Ethik... Neu übersetzt... von I. Stern* — Leipzig: Philipp Reclam, o. J. [1887].
- ⑫ *Spinoza-Brevier. Zusammengestellt und mit einer Einleitung herausgegeben von Arthur Liebert*, Zweite, mit veränderter Einleitung versehene Aufl. — Leipzig: Felix Meiner, 1918.
- ⑬ **Spinoza:** *Ethic, Demonstrated in Geometrical Order... Translated... by W. Hale White, Translation Revised by Amelia Hutchison Stirling*, Third revised edition — London: Duckworth, 1899.
- ⑭ **Spinoza:** *Improvement of the Understanding, Ethics and Correspondence. Translated... by R. H. M. Elwes with an Introduction by Frank Sewald* — New York: Willey, 1901.
- ⑮ *Spinoza's Short Treatise on God, Man, & His Well-Being, Translated and Edited, with an Introduction and Commentary and a Life of Spinoza by A. Wolf* — London: Adam and Charles Black, 1910.
- ⑯ **Auerbach, Berthold:** *Spinoza. Ein Denkerleben* — Mannheim: Bassermann & Mathy, 1854.
- ⑰ **Caird, John:** *Spinoza* — Edinburgh and London: William Blackwood and Sons, 1888.
- ⑱ **Camerer, Theodor:** *Die Lehre Spinoza's* — Stuttgart: J. G. Cotta, 1877.
- ⑳ **Camerer, Theodor:** *Spinoza und Schleiermacher. Die kritische Lösung des von Spinoza hinterlassenen Problems* — Stuttgart und Berlin: J. G. Cotta'sche Buchhandlung Nachfolger, 1903.
- ㉑ *Chronicon spinozanum*, Tomus V — Hagae Comitum, Societas Spinozana, 1927.
- ㉒ *Unter dem Banner des Marxismus:* Deborin, A., "Benedictus Spinoza (1632-1677)," etc. — II Jg. 1928, Heft 1/2 (4/5)
- ㉓ **Flint, Robert:** *Anti-Theistic Theories, being The Baird Lecture for 1877* — Edinburgh and London: William Blackwood and Sons, 1879.
- ㉔ **Franck, Ad.:** *Philosophie et religion*, Deuxième édition — Paris: Didier et Cie, 1869.
- ㉕ **Gebhardt, Carl:** *Spinozas Abhandlung über die Verbesserung des Verstandes. Eine entwicklungsgeschichtliche Untersuchung* — Heidelberg: Carl Winter, 1905.
- ㉖ **Gebhardt, Carl:** *Spinoza* — Leipzig: Philipp Reclam, 1932.
- ㉗ **Hallett, H.F.:** "Spinoza's Conception of Eternity," Offprint from *Mind*, Vol. XXXVI, 1928.
- ㉘ **Joachim, Harold H.:** *The Nature of Truth: An Essay* — Oxford: Clarendon, 1906.
- ㉙ **Joël, Manuel:** *Spinoza's theologisch-politische Traktat auf seine Quellen geprüft* — Breslau: Schletter (H. Skutsch), 1870.
- ㉚ **Joël, Manuel:** *Zur Genesis der Lehre Spinoza's mit besonderer Berücksichtigung des Kurzen Traktats „von Gott, dem Menschen und dessen Glückseligkeit.“* — Breslau: Schletter (H. Skutsch), 1871.
- ㉛ **Kayser, Rudolf:** *Spinoza. Bildnis eines geistigen Helden* — Wien und Leipzig: Phaidon-Verlag, 1932.
- ㉜ „Spinoza Festheft,“ *Kant-Studien*, Band XXXII, Heft 1, 1927.
- ㉝ **Pollock, Frederick:** *Spinoza. His Life and Philosophy* — London: C. Kegan Paul, 1880.
- ㉞ **Ratner, Joseph:** *The Philosophy of Spinoza. Selected from His Chief Works with a Life of Spinoza and an Introduction* — New York: The Modern Library, 1927.
- ㉟ **Renan, Ernst:** *Spinoza. Rede am 21. Februar 1877 bei dessen zweihundertjähriger Todesfeier gehalten im Haag, Autorisirte Uebersetzung von C. Schaarschmidt* — Leipzig: Erich Koschny (L. Heimann's Verlag), 1877.
- ㊱ **Stern, I.:** *Die Philosophie Spinozas*, Dritte stark verbesserte Auflage — Stuttgart: Dietz, 1908.
- ㊲ **Raynal (Abbé):** *Histoire du Stadhouderat depuis son origine jusqu' à present*, Quatrième édition — Hague, 1748.
- ㊳ **Da Silva Rosa, J. S.:** *Geschiedenis der portugeesche Joden te Amsterdam 1593-1925* — Amsterdam: Menno Hertzberger, 1925.
- ㊴ **Zimmels, H. J.:** *Die Marranen in der rabbinischen Literatur* — Berlin: Rubin Mass, 1932.
- ㊵ **Bab, Julius:** *Rembrandt und Spinoza. Ein Doppelbildnis im deutsch-jüdischen Raum* — Berlin: Philo, 1934.
- ㊶ **Landsberger, Franz:** *Rembrandt, the Jews and the Bible, translated by Felix N. Gerson* — Philadelphia: The Jewish Publication Society of America, 1946.
- ㊷ **Van de Waal, H.:** "Rembrandt and the Feast of Purim," Offprint from *Oud-Holland* (?), (1969 or 1970?), pp. 199-223.

- ④3 **Zwarts, Jac.**: *De Hebreewsche Typografie van Utrecht, overdruk uit „Het Grafisch Museum”*— Utrecht: M. G. V., 1938.
- ④4 *Een en dertigste Jaarboek van Het Genootschap Amstelodamum*: Hirschel, L., “Uit de voorgeschiedenis den Hebreewsche Typographie te Amsterdam,” etc. — Amsterdam: J. H. de Bussy, 1934.
- ④6 **Kastein, Josef**: *Uriel da Costa oder die Tragödie der Gesinnung* — Berlin: Rowohlt, 1932.
- ④7 **Kastein, Josef**: *Uriel da Costa oder die Tragödie der Gesinnung* — Wien: R. Löwit, 1935.
- ④9 **Burgersdijck, Fr.**: *Institutionum logicarum libri duo ...* — Cambridge, Joann. Hayes, 1680.
- ⑤5 **Lévy, Louis-Germain**: *Maïmonide*, Nouvelle édition — Paris: Félix Alcan, 1932.
- ⑤6 **Munk, S.**: *Mélanges de philosophie juive et arabe*, Nouvelle édition — Paris: J. Vrin, 1927.
- ⑤8 **Bacon, Francis**: *Sylva Sylvarum, or a Naturall Historie...* — London: William Lee, 1628.
- ⑥1 **Descartes, René**: *Epistolae, partim ab Auctore Latino Sermone conscriptae, partim ex Gallico translatae*. 3 vol. — Amsterdam: Ex typographia Blaviana Sumptibus Societatis, 1682-83.
- ⑥2 **Gassendi, Pierre** (1592-1655): *Institutio Astronomica Iuxta Hypotheses tam Veterum, quam Copernici, et Tychois...* — Paris: L. de Heuqueville, 1647.
- ⑥3 **Hobbes, Thomas**: *Leviathan, sive De Materia, Forma, et Potestate civitatis ecclesiasticae et civilis. Elementorum philosophiae sectio tertia de cive. Dialogus physicus de Natura aeris... De Principiis et ratiocinatione geometrarum* — Amsterdam: Bleau, 1670.
- ⑥6 **Aristoteles** (前384-322): *Rhetoricorum ad Theodecten, Georgio Trapezuntio interprete, Libri III* — Basel: Frobenius, 1534.
- ⑥7 **Patritius (Patrizzi), Francesco** (1413-1494): *De Discorsi del Reverendo Monsignor Francesco Patritij Sanese Vescovo Gaiettano, sopra alle cose appartenenti ad una città libera, e famiglia nobile...* libri nove— Venezia: Aldus, 1545. [Brunet IV, 441 ルネサンスの哲学者パトリッツィとは別人].
- ⑥8 **Virgile** (前70-前19): *La seconde eglogue des Bucoliques, Les quatre Livres des Georgiques, Les quatre premiers Livres de L'Eneide* — Paris: Charles L'Angelier, 1554.
- ⑥9 **Zabarella, Giacomo** (1533-1589): *De Rebus naturalibus libri XXX, quibus quaestiones, quae ab Aristotelis Interpretibus hodie tractari solent, accurate discutiuntur* — Frankfurt: L. Zetzner, [1617 ? 扉頁に破れがあるため判読が難しい].
- ⑦1 **Buxtorf, Johannes**: *Lexicon Hebraicum et Chaldaicum...* — Basel: Joh. Philipp Richter, 1710.
- ⑦2 **Buxtorf, Johannes** (Pater): *De Synagoga Judaica, de Judaeorum Fide, Ritibus, Ceremoniis, tam Publicis & Sacris, quam Privatis, in domestica vivendi ratione, Tertia editione de novo restaurata... redacta, a Johanne Buxtorfio Fil.* — Basel: Emanuel König, 1680.
- ⑦5 **Cuneus [Kuhn], Petrus**: *De Republica Hebraeorum Libri III, Editio altera, priore emendatior* — Leiden: Nicolaus Eickhoutus, 1631.
- ⑦6 **Godwyn, Thomas** (1586 [or 87]-1642): *Moses et Aaron, seu Civiles et Ecclesiastici Ritus Antiquorum Hebraeorum...* Editio quarta — Utrecht : Guilielmus Poolus, 1698.
- ⑦9 *Charakterzüge. Grundsätze und Meinungen der Königin Christine von Schweden* — Winterthur: Steiner, 1801.
- ⑧0 **Huet, Petrus Daniel** (1630-1721): *Demonstratio Evangelica... Tertia editio* — Paris: Daniel Hortemels, 1690.
- ⑧2 **Billeb, Joann. Samuel**: *Sefarim sive Epistolas Propheticas in Dan. C. IX. com. 2* — Wittenberg: Cerdesianus, 1724.
- ⑧3 **Wolle, Christophorus**: *De Singulari Facto ac Fato Uxoris Lothi. ad Genes. XVIII. Com. XXVI.* — Leipzig: Litterus Titianus, 1730.
- ⑧5 *Leibnitz's Deutsche Schriften. Herausgegeben von G. E. Guhrauer*. 2 Bde. — Berlin: Veit, 1838 u. 1840.
- ⑧6 **Leibniz**: *Opera philosophica quae exstant Latina, Gallica, Germanica omnia. Edita... instruxit J. E. Erdmann*. 2 Bde. in 1 — Berlin: Eichler, 1840.
- ⑧7 **Leibniz**: *The Monadology and Other Philosophical Writings. Translated... by Robert Latta* — Oxford: Clarendon Press, 1898.
- ⑧8 **Diderot, Denis** (1713-1784): *Lettre sur les aveugles, a l'usage de ceux qui voyent* — London, 1749.
- ⑧9 **Jacobi, Friedrich Heinrich** (1743-1819): *Jacobi an Fichte* — Hamburg: Friedrich Perthes, 1799.
- ⑨0 **Fichte, Johann Gottlieb** (1762-1814): *Versuch einer Kritik aller Offenbarung* — Königsberg: Hartung, 1793.
- ⑨1 **Saavedra y Fajardo, Diego de** (1584-1648): *L'idea di UN prencipe politico christiano* — Venezia: Marco Garzoni, 1648.
- ⑨2 **Helvetius, C. A.**: *De L'Esprit, or Essays on the Mind... A New Edition* — London: Albion, 1810.
- ⑨3 *The Life of Lucilio Vanini, Burnt for Atheism at Toulouse with an Abstract of His Writings...* — London: W. Meadows, 1730.
- ⑨4 **Oederus, G. L.**: *Catechesis racoviensis, seu Liber Socinianorum Primarius...* — Frankfurt u. Leipzig: Schmidt, 1739.
- ⑨5 *The History of the Surprising Rise and Sudden Fall of Masaniello, the Fisherman of Naples* — London: R. Walker, 1747.
- ⑨6 **Quevedo, Francisco de** (1580-1645): *Visions*. Translated from the Spanish — London: Edom & Thomson, 1795.

ETHICES

Parti Prima,

DE DEO.

DEFINITIONES.

I. **P**er causam sui intelligo id, cujus essentia involvit existentiam; sive id, cujus natura non potest concipi, nisi existens.

II. Ea res dicitur in suo genere finita, quae alia ejusdem naturae terminari potest. Ex. gr. corpus dicitur finitum, quia aliud semper majus concipimus. Sic cogitatio alia cogitatione terminatur. At corpus non terminatur cogitatione, nec cogitatio corpore.

III. Per substantiam intelligo id, quod in se est, & per se concipitur: hoc est id, cujus conceptus non indiget conceptu alterius rei, à quo formari debeat.

IV. Per attributum intelligo id, quod intellectus de substantia percipit, tanquam ejusdem essentiam constituens.

V. Per modum intelligo substantiae affectiones, sive id, quod in alio est, per quod etiam concipitur.

VI. Per Deum intelligo ens absolute infinitum, hoc est, substantiam constantem infinitis attributis, quorum unamquodque æternam, & infinitam essentiam exprimit.

A

E-

「エチカ」第一部の冒頭(③スピノザ『遺稿集』より)

2005年7月2日発行

山梨大学附属図書館

〒400-8510 山梨県甲府市武田4-4-37
<http://www.lib.yamanashi.ac.jp/spinoza/>
E-mail: serv@ccn.yamanashi.ac.jp